『比較論理学研究』第6号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書(2008)

Dialectica et Neoaristotelismus
——Whiteheadの検討(2)——

赤井清晃

3．Whiteheadのsatisfaction

（承前）前稿の最後で，Whiteheadの「過程」processとしての「現実的存在」について，その過程としての現実的存在は，不十分な主体的統一性をもった多くのはたらきが，はたらきの完結した統一性に終結することを指して，「満足」satisfactionということに言及した．Whiteheadは，このことを説明するために，ロックやデカルトに言及して，それらの共通する部分と異なる部分を指摘することによって，理解を促そうとするが，誤解を恐れずに，共通する部分に着目すると，「満足」satisfactionに終結するとされる「過程」processそのものが，現実存在の構造であるのだが，それは，ロック的には，現実的存在の「実在の内部構造」であり，デカルト風に言えば，その「過程」は，現実的存在がそれ自身において形相的に(formaliter)にあるところのもの，ということであった．

> The process itself is the constitution of actual entity; in Locke's phrase, it is the 'real internal constitution' of the actual entity. In the older phraseology employed by Descartes, the process is what the actual entity is in tiself, 'formaliter.' The terms 'formal' and 'formally' are here used in this sense. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.219.]
> その過程そのものが現実的存在の構造である．ロックの語法では，それは現実的存在の「実在の内的構造」である．デカルトが使った前から知られている語法では，その過程は，現実的存在がそれ自身において「形相的に」formaliterあるところのものである．「形式的」formalとか「形式的に」formallyなどの用語は，ここでは，こういう意味で使用されている．［平林康之訳］

しかし，さらに重要なことは，完結した統一性である「満足」は，現実的存在がそれ自身を超えて(beyond)あるものを具現しているとされる点である．この点を理解するためには，現実的存在の満足についてのWhiteheadの説明に，もう少し，耳を傾ける必要がある．先に，形而上学の目的の一つであるとされた分析の種類について，Whiteheadは，次のように述べている．

> The possibility of finite truths depends on the fact that the satisfaction of an actual entity is divisible into a variety of determinate operations. The operations are 'prehensions.' But the negative prehensions which comsist of exclusions from contribution to the concrescence can be treated in their subordination to the positive prehensions. These positive prehensions are termed 'feelings.' The process of concrescence is divisible into an initial stage of many feelings, and a succession of subsequent phases of more complex feelings integrating the earlier simpler feelings, up to the satisfaction which is one complex unity of feeling. This is the 'genetic' analysis of the satisfaction. Its 'coordinate' analysis will be given later, in Part IV. Thus a component feeling in the satisfaction is to be assigned, for its origination, to an earlier phase of the concrescence. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, pp.220-221.]
> 有限な真理が可能であるということは，現実的存在の満足が，多種多様な限定された働きにわけられる，という事実に基づいている．これらの働きが，「抱握」である．しかし，合生への貢献からの排除から成る否定的抱握は，肯定的抱握に従属しているものとして取り扱われうる．この肯定的抱握は，「感受」と呼ばれる．合生の

過程は，多くの感受の原始的段階と，前期のより単純な感受を統合して，感受の一つの複合的統一性である満足に至る一層複合的な感受の継起的な諸相の連続とに，分けられる．これが，満足の「発生論的」分析である．その「同位的」coordinate 分析は，後に第四部で与えられるであろう． したがって満足を構成している感受は，その起源に関して，合生の初期相に割り当てられるべきである．[平林康之訳]

満足についての分析の在り方を，Whitehead は，「発生論的」分析と「同位的」coordinate 分析に分け，ここでは，「抱握」prehensions と「感受」feelings について述べながら，「発生論的」分析によって，合生の過程を記述し，現実的存在の満足を，多くの感受の原始的段階と，前期のより単純な感受を統合して，感受の一つの複合的統一性である満足に至る一層複合的な感受の継起的な諸相の連続としている．ただし，ここでもことわられているように，この場合の「感受」は，説明の都合上，肯定的抱握として扱われる．というのも，否定的抱握は，肯定的抱握に従属しているものとして取り扱われうるからである．この意味での「感受」，すなわち，肯定的抱握は，合生をもたらす移行とされるが，その合成をもたらす移行ということに着目することによって，さらに，この意味での「感受」の複合的構造が，次のように，５つの要因に分析される．

This is the general description of the devisible character of the satisfaction, from the genetic standpoint. The extensiveness which underlies the spatio-temporal relations of the universe is another outcome of this divisible character. Also the abstraction from its own full formal constitution involved in objectifications of one actual entity in the constitutions of other actual entities equally depends upon this same divisible character, whereby the actual entity is conveyed in the particularity of some one of its feelings. A feeling - i.e., a positive prehension - is essentially a transition effecting a concrescence. Its complex constitution is analysable into five factors which express what that transition consists of, and effects. The factors are: (i) the 'subject' which feels, (ii) the 'initial data' which are to be felt, (iii) the 'elimination' in virtue of negative prehensions, (iv) the 'objective datum' which is felt, (v) the 'subjective form' which is how that subje! ct feels that objective datum. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.221.]

これが，発生論的立脚点からの，満足についての可分的性格の一般的記述である．宇宙の時ー空的諸関係の根拠をなす延長性は，この可分的性格の別の所産である．また，一つの現実的存在が他の現実的諸存在の構造に客体化されることに含まれるそれ自身の完全な形相的構造からの抽象も，等しくこの同じ可分的性格に依存しており，それによってその現実的存在は，その諸感受の或る一つのものの特殊性で伝達されるのである．感受というものーーすなわち肯定的抱握ーーは，本質的に，合生をもたらす移行である．感受の複合的構造は，その移行が何から成っており何をもたらすかを表現している五つの要因に，分析できる．これらの要因は，(i) 感じる「主体」，(ii) 感じられうる「始原的諸所与」，(iii) 否定的抱握による「除去」elimination，(iv) 感じられる「客体的所与」，(v) その主体がその客体的所与をいかに感受するかという「主体的形式」である．[平林康之訳]

この分析によって，感受の複合的構造には，５つの要因があるとされるが，これらは，大きく分けて，感じる「主体」であるか，感じられる「所与」であるか，あるいは，その感受の仕方としての「主体的形式」であるか，のいずれかであると言うことができるであろう．もともと，「主体」というものを前提あるいは想定せずに，いきなり，「抱握」prehensions と「感受」feelings が語られたことからすると，何故，ここで，「主体」や「主体的形式」が語られるのとの疑問が生じるかもしれない．しかし，満足とは，現実的存在の満足であるのだが，それは，同時に，「主体的満足」subjective satisfaction であったことを思い起こす必要があろう．それは，確かに，「不十分な主体的統一性のはたら」と，その「はたらきの完結した統一性」とによって説明されるものであったからである．またしかし，この「主体」は，現実的存在がそれ自身を超えて (beyond) あるものを具現することによって，ある意味で解消されるものでもあることが予感されるのである．そして，そのことは，その感受の仕方としての「主体的形式」と密接に関わっているであろう．それは，「感受」ということが問題とされるとき，「感受」と言った時点ですでに，その「感受」の仕方は決定されているからである．しかし，「決定されている」ということは，「主体」によるのか，と言えば，ある意味では，そ

うであるが，ある意味では，そうではない，と言わなければならない．というのも，「決定されている」ということは，「主体」にだけかかわるのではなくて，先に分析された，5つの要因，すなわち，感受の複合的構造すべてについて言えることだからである．実際，Whitehead は，次のように言っている．

> A feeling is in all respects determionate, with a determinate subject, determinate initial data, determinate negative prehensions, a determinate objective datum, and a determinate subjective form. There is a transition from the initial data to the objective datum effected by the elimination. The initial data constitute a 'multiplicity,' or merely one 'proper' entity, while the objective datum is a 'nexus,' a proposition, or a 'proper' entity of some categoreal type. There is a concrescence of the initial data into the objective datum, made possible by the elimination, and effected by the subject-give form. The objective datum is the perspective of the initial data. The subjective form receives its determination from the negative prehensions, the objective datum, and the conceptual origination of the subject. The negative prehensions are determined by the categoreal conditions governing feelings, by the subjective form, and by the initial data. This mutual determination of the ! elements involved in a feeling is one expression of the truth that the subject of the feeling is causa sui. The partial nature of a feeling, other than the complete satisfaction, is manifest by the impossibility of understanding its generation without recourse to the whole subject. There is a mutual sensitivity of feelings in one subject, governed by categoreal conditions. This mutual sensitivity expresses the notion of final causation in the guise of a pre-established harmony. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.221.]
> 感受は，あらゆる点で決定されている，すなわち決定された主体，決定された始原的諸所与，決定された否定的抱握，決定された客体的所与，決定された主体的形式をもっている．そこには，始原的諸所与から除去によってもたらされた客体的所与への移行が存在する．始原的諸所与は，「多岐性」すなわち単に一つの「固有の」存在を構成するが，他方，客体的所与は，「結合体」，命題，すなわち或る範疇型の「固有の」存在である．そこには，始原的諸所与の，客体的所与——除去によって可能になり主体的形式によってもたらされた——への合生が存在する．その客体的所与は，その始原的諸所与の展望である．主体的形式は，否定的抱握，客体的所与，その主体の観念的創始 conceptual origination から，みずからの決定を受けとる．否定的抱握は，感受を制御する範疇的諸条件によって，主体的形式によって，始原的諸所与によって，決定される．感受に含まれている諸要素のこの相互決定は，その感受の主体は自己原因であるという真理の一表現なのである．完結した満足を別として，感受の局部的な本性は，主体全体に訴えることなしには，それの生成を理解することができないことによって明示されている．そこには，範疇的諸条件によって制御されている，一つの主体における諸感受の相互感受性 mutual sensi-tivity of feelings がある．この相互感受性は，予定調和を装って目的因の概念を表現している．[平林康之訳]

ここで，「あらゆる点で決定されている」と言われる際の，「決定」は，主体的形式が決定されていることでもあるが，それはすでに決定されているものであり，すでに決定されているものを受け取るしかないものである．この意味で，「感受の主体は自己原因であるという」ことが，真理の一表現であるとされるのである．また，一つの主体における「諸感受の相互感受性」mutual sensitivity of feelings ということがあるとされ，それは，「予定調和を装って目的因の概念を表現している」と言われることによって，ライプニッツとアリストテレスへの Whitehaed の態度が窺い知られる．ところで，Whitehead が，「主体の観念的創始」(平林訳) conceptual origination と言っているものは，「懐抱すること (concipere) に起源をもつ」という意味であろう．すなわち，自らの内に抱きもつことによる起源ということであって，例えば，ロックの用語法の検討の際に，言及され，批判されたような「観念」ideas という意味では決してない，と言わなければならない．おそらくは，このことを懸念してか，Whitehead は，次のように言っているのであろう．

> A feeling cannot be abstracted from the actual entity entertaining it. This actual entity is termed the 'subject' of the feeling. It is in virtue of its subject that the feeling is one thing. If we abstract the subject from the feeling we are left with many things. Thus a feeling is a particular in the same sense in which each actual entity is a particular. It is one aspect of its own subject. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.221.]
> 感受はそれを抱懐している現実的存在から抽象することはできない．この現実的存在は，その

感受の「主体」と呼ばれる．感受が一事物であるということは，その主体によってなのである．もしわれわれが主体を感受から抽象するとするならば，われわれは多くの事物と取り残される．したがって，各現実的存在が個別的なものであると同じ意味で，感受は，個別的なものである．それは，それ自身の主体の一局面なのである．[平林康之訳]

ここで，「それ（感受）を抱懐している」(平林訳）と言われている entertaining という語の意味は，「～を受け入れている」，すなわち，先の引用での「懐抱する」(concipere) ということとほぼ，同義であろう．このことが，「感受の主体は自己原因」という表現になってあらわれたのであったが，また，その感受の「主体」と呼ばれる現実的存在から，当の感受を抽象することはできないのである．従って，各現実的存在が個別的なものであるとすれば，，感受もまた，個別的なものである，ということになる．ただし，それは，それ自身の主体の一局面なのである，ということが注意される．そのことは，各現実的存在相互の関係をみる上で，重要な観点である．

According to the ontological principle there is nothing which floats into the world from nowhere. Everything in the actual world is referable to some actual entity. It is either transmitted from an actual entity in the past, or belongs to the subjective aim of the actual entity to whose concrescence it belongs. This subjective aim is both an example and a limitation of the ontological principle. It is an example, in that the principle is here applied to the immediacy of concrescent fact. The subject completes itself during the process of concrescence by a self-criticism of its own incomplete phases. In another sense the subjective aim limits the ontological principle by ita own autonomy. But the initial stagė of its aim is an endowment which the subject inherits from the inevitable ordering of things, conceptually realized in the nature of God. The immeditacy of the concrescent subject is constituted by its living aim at its own self-constitution. Thus the initial stage of th! e aim is rooted in the nature of God, and its completion depends on the self-causation of the subject-superject. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.244.]

存在論的原理によれば，どこからともなく世界に漂いきたるようなものは，何一つないのである．現実世界における如何なるものも，或る現実的存在に帰することができる．それは，過去の現実的存在から伝達され transmit ているか，或いは，それが属する合生をもつ現実的存在の主体的傾向に属しているか，いずれかである．この主体的傾向は，存在論的原理の実例であると共に，それの制限態 limitation でもある．それが実例であるのは，主体的傾向では，その原理が合生的事実の直接態に適用されている点にある．その主体は，それ自身の未完の諸相を自己批判することによって，合生の過程の間に，みずからを完成する．もう一つの別の意味で，その主体的傾向は，それ自身の自律性によって存在論的原理を制限する．しかしその指向の最初の段階は，神の本性のうちに観念的に実現された，事物の不可避的な秩序づけから，その主体が継承する基本財産なのである．合生する主体の直接態は，それみずからの自己構成を生き生きと目指すことによって，成立している．したがって，その指向の最初の段階は，神の本性に根ざしているが，その指向の完成は，自己超越的主体 subject-su! perject の自己原因に懸かっているのである．[平林康之訳]

ここにおいて，感受の主体は自己原因であるという表現であらわされていたことは，「主体」が，自己を超越しつつ，かつ自己原因でもある，ということによって，所与や対象，あるいは客体と対概念となるような「主体」が，ある意味で，消失するとも言える事態にを表わしていたことが分かってくる．その際，「主体」は，それ自体として，実体化あるいは対象化されるのではなくて，慎重に「主体的傾向」という表現を用いている．しかし，その「主体的傾向」は，「傾向」あるいは「指向」，つまり，aim であり，自己を超越しつつ，かつ自己原因でもある，とわれる，自己超越的主体 subject-superject なのであるが，結局は，それは，「神の本性のうちに観念的に実現された」ものであり，「神の本性に根ざしている」と言われざるをえないのである．従って，Whitehead の記述を辿っていこうとすると，我々は，神の問題に行き当らざるをえないわけである．

4．Whitehead における神の問題

神について，Whitehead は，前述の「傾向」あるいは「指向」（つまり，aim ）の観点から，次のように述べている．

This function of God is analogous to the remorseless working of things in Greek and in Buddhist

thought. The initial aim is the best for that impasse. But if the best be bad, then the ruthlessness of God can be personified as Atè the goddes of mischief. The chaff is burnt. What is inexorable in God, is valuation as an aim towards 'order'; and 'order' means 'society permissive of actualities with patterned intensity of feeling arising from adjusted contrasts.' In this sense God is the principle of concretion; namel, he is that actual entity from which each temporal concrescence receives that initial aim from which its self-causation starts. That aim determines tha initial gradations of relevance of eternal objects for conceptual feeling; and constitutes the autonomous subject in its primary phase of feelings with its initial conceptual valuations, and with its initial physical purposes. Thus the transition of the creativity from an actual world to the correlate novel co! ncrescence is conditioned by the relevance of God's all-embracing conceptual valuations to the particular possibilities of transmission from the actual world, and by its relevance to the various possibilities of initial subjective from available for the initial feelings. In this way there is constituted the concrescent subject in its primary phase with its dipolar constitution, physical and mental, indissoluble. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.244.]

この神の機能は，ギリシア思想や仏教思想における事物の情容赦もなき所業に類似している．最初の指向は，その窮境 impasse にとって，最良のものである．しかしその最良のものが災害をもたらすならば，神の無情さは，破滅の女神アーテーの如く擬人化される．廃物は，燃やされる．神において何が情容赦ないかということは，「秩序」に向う指向としての価値づけにある．そして「秩序」とは，適合した対比から生ずる感受のパターン化された強度をもつ諸現実態を許容する「社会」society を意味しているのである．この意味で，神は，具体化 concretion の原理なのである．すなわち神は，各時間的な合生がその自己原因性の出発点となる最初の指向を受け取るところの，現実的存在なのである．その指向は，観念的感受のために，永遠的諸客体の最初のさまざまに階層づけられた関連を決定する．またそれは，最初の観念的価値づけをもち且つ最初の物的目的をもつ諸感受の原初的相における，自律的主体を構成する．したがって，現実的世界から，それと相関的な新しい合生への，創造性の移行は，次のことによって条件づけられる．すなわち神のすべてにわたる観念的価値づけが現実世界からの伝達の個々の諸可能性に対してもつ関連によってであり，また原初的諸感受に有効な原初的な主体的形式の様々な可能性に対して現実世界のもつ関連によってである．このようにして，物的および心的との溶解不能な双極的構造をもつ原初的相において，合生する主体が構成されるのである．[平林康之訳]

「神は，各時間的な合生がその自己原因性の出発点となる最初の指向を受け取るところの，現実的存在」である，とされる．「指向」として，一旦，「主体」的在り方とは区別された，一種の，関係性，あるいは，はたらき，というべきものが，価値づけや「秩序」を得ることによって，再び，「自律的主体を構成する」ことになる．つまり，ある意味で，「主体」となるのである．それは，しかし，「現実的存在」としての「神」である．しかし，ここで，注意しておかなければならないのは，平林訳において，「観念的感受」conceptual feeling や「観念的価値づけ」conceptual valuations と訳されているものは，先にも，注意を促したように，その「観念的」というときの「観念」は，ロックやデカルトなどの学説の吟味・検討で俎上にのぼった「観念」ideas ではない．むしろ，「懐抱すること (concipere) に起源をもつ」という意味である．内にかき抱かれた感受や価値付け，ということであるから，そのようなものは，それ自体が，現実的存在（ここでは，神）なのである．そのようなものを，Whitehead は，たしかに，「神」と言っているのであるけれども，さらに続けて，「神」なる表現を用いないで（つまりは，「主体」としか言わないということであるが），次のようにも述べている．

If we prefer the phraseology, we can say that God and the actual world jointly constitute the character of the creativity for the initial phase of the novel concrescence. The subject, thus constituted, is the autonomous master of its own concrescence into subject-superject. It passes from a subjective aim in concrescence into a superject with objective immortality. At any stage it is subject-superject. According to this explanation, self-determination is always imaginative in its origin. The deterministic efficient causation is the inflow of the actual world in its own proper character of its own feelings, with their own intensive strength, felt and re-enacted by the novel concrescent subject. But this re-enaction has a mere character of conformation to pattern. The subjective valuation is the work of novel conceptual feeling; and in propor-

tion to its importance, acquired in complex processes if integration and reintegration, this autonomous conceptual element modifies the ! subjective forms throughout the whole range of feeling in that concrescence and thereby guides the integrations. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.245.]

もしこういう言葉遣いを選ぶならば，われわれは，現実的世界とは，共同して，新しい合生の最初の相に対して，創造性の性格を構成する，ということができる．このように構成された主体は，自己超越的主体へのそれ自身の合生の自律的な主人である．それは，合生における主体的指向から，客体的不滅性を伴う自己超越体へと，移行して行く．どの段階においても，それは自己超越的主体である．この説明によれば，自己決定は，つねにその起源において想像力によるものである．決定論的な動力因は，現実世界がそれ自身の感受のそれ自身の固有の性格において流入することである．その感受というのは，それ自身の内包的な強さでもって，新しい合生する主体によって感受され再演される感受なのである．しかしこの再演は，パターンへの順応という性格をもつにすぎない．主体的な価値づけは，新しい観念的感受の仕事でもある．そして統合と再統合との複雑な過程において獲得されるその重要性に比例して，この自律的な観念的な要素は，その合生における感受の全作用領域のいたるところで主体的諸形式を修正し，それによって統合を嚮導するのである．[平林康之訳]

この言い換えによれば，「構成された主体は，自己超越的主体へのそれ自身の合生の自律的な主人」ということになり，「決定論的な動力因は，現実世界がそれ自身の感受のそれ自身の固有の性格において流入すること」と言われたり，「主体的な価値づけは，新しい観念的感受の仕事」でもあるという．もちろん，この「観念的感受」conceptual feelingや，その後で言われる，「自律的な観念的な要素」autonomous conceptual elementという場合，「観念的」とは，先に注意したような意味である．逆に言えば，感受や要素，あるいは，秩序や価値づけを受け取る自律的主体としての現実的存在と言い直すことができるような神である，ということになるであろう．他の哲学者の名を挙げて，論評を加えているWhiteheadであるが，一般には，プラトンの『ティマイオス』の宇宙論を継承して，現代のプラトニストなどと言われることもあるが，一方で，この「神」に関しては，意外にも（いや，何故そうなのかが分かれば，決して意外なことではない），Whiteheadは，アリストテレスに近づくのである．

He is the lure for feeling, the eternal urge of desire. His particular relevance to each creative act, as it arises from its own conditioned stand-point in the world, constitutes him the initial 'object of desire' establishing the initial phase of each subjective aim. A quotation from Aristotle's *Metaphysics* expresses some analogies to, and some differences from, this line of thought: [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.344.]

神は，感受のための誘いであり，欲望の永遠の衝動 eternal urge である．世界におけるそれ自身の制約された立脚点から生じてくるような，それぞれの創造の行為に対する神の特殊な関連は，神のために，それぞれの主体的指向の最初の相を確立する最初の「欲望の客体」を構成している．アリストテレスの『形而上学』からの次の引用は，このような思考の方向との，若干の類似とまた相違を表現している．[平林康之訳]

と，このように述べて，アリストテレスの『形而上学』Λ巻(1072a23-32)のロスによる英訳を掲げている．

And sincethat which moves and is moved is intermediate, there is something which moves without being moved, being eternal, substance, and actuality. And the object of desire and the object of thought move in this way; they move without being moved. The primary objects of desire and of thought are the same. For the apparent good is the object of appetite, and the real good is the primary object of rational wish. But desire is consequent on opinion rather than opinion on desire; for the thinking is the starting-point. And thought is moved by the object of thought, and one of the two columns of opposites is in itself the object of thought; [Aristotle, *Metaphysics*, 1072a23-32, trans. by Professor W.D.Ross.]

これは，いわゆる「不動の動者」が「愛されるものとして，他のものを動かす」という件であり，欲求の対象と思惟の対象は，それぞれの第一のものにおいては同一である，といわれる．

このことを念頭において，Whiteheadは，続けて次のように言う．

> Aristotle had not made the distinction between conceptual feelings and the intellectual feelings which alone involve consciousness. But if 'conceptual feeling,' with its subjective form of valuation, be substituted for 'thought,' 'thinking,' and 'opinion,' in the above quotation, the agreement is exact. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.344.]
> アリストテレスは，観念的感受と，それだけが意識を含んでいる知的感受 intellectual feelings との区別をしなかった．しかし，価値づけという主体的形式をもつ「観念的感受」が，上述の引用文における'thought'，'thinking'，'opinion'に代わるならば，意見の一致は寸分違わない．[平林康之訳]

さて，このようなWhiteheadによるアリストテレスの神への言及に着目して，Collingwoodは，S.Alexanderとの比較を交えて，興味深いことを指摘している．Whiteheadも，すでに，「満足」や「感受」について，説明する中で，Alexanderの「享受」enjoymentという用語との類似性に気付いていた．

> Each actual entity is conceived as an act of experience arising out of data. It is a process of 'feeling' the many data, so as to absorb them into the unity of on individual 'satisfaction.' Here 'feeling' is the term used for the basic generic operation of passing from the objectivity of the data to the subjectivity of the actual entity in question. Feelings are variously specialized operations, effecting a transition into subjectivity. They replace the 'neutral stuff' of certain realistic philosophers. An actual entity is a process, and is not describable in terms of the morphology of a 'stuff.' This use fo the term 'feeling' has a close analogy to Alexander's use of the term 'enjoyment'. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.40.]
> それぞれの現実的存在は，所与に起因する経験の行為と考えられる．それは，多くの所与を一つの個体的「満足」の統一へと同化するように，多くの所与を「感受する」過程なのである．ここでは「感受」とは，所与の客体性から当の現実的存在の主体性への推移の基礎をなす類的な働きのために用いられる述語である．いろいろな感受は主体性への転移を成し遂げるさまざまに特殊化された働きである．それらは，或る実在論哲学者のいう「中性的素材」neutral stuffに取って代わる．現実的存在とは過程であるが，それは「素材」stuffの形態学の用語では記述不能である．感受という用語をこのように使うのは，「享受」enjoymentという用語のアレグザンダーの用法に極めてよく類似している．[平林康之訳]

CollingwoodのWhiteheadの評価は，アリストテレスに関する限り，我々が既に指摘したことと同じ線にある．すなわち，Whiteheadのアリストテレスの神への接近という点において，である．

> Whitehead, following out his own train of thought, has thus reconstructed for himself Aristotle's conception of God as the unmoved mover, initiating and directing the entire cosmic process through its love of Him. And it is curious to observe that the identity of his own thought with Aristotle's, which Whitehead gladly admits, had to be pointed out to him by a friend, Whitehead having apparently never read Aristotle's Metaphysics for himself. I mention this not to ridicule Whitehead for his ignorance of Aristotle - nothing could be farther from my mind - but to show how in his own thought a Platonic cosmology may be seen, in the pages of Process and Reality, turning to an Aristotelian. [Collingwood, *The Idea of Nature*, p.170.]

このことは，Alexanderとの比較において，より明らかになるかもしれない．というのも，Alexanderの場合，彼のいわゆる「偶然的進化」emergent evolutionの説に従えば，スペンサーなどとは，違って，進化の倫理性，あるいは，価値という面を強調するので，機械的物質，物理，化学的存在，生命，意識，精神，価値という進化の発展を説くので，「神」あるいは「神性」deityが最高の段階に位置することになる．そして，人間がその「神性」へ完全に一致することは不可能であるから，人間にとっては，それは，絶対的，固定的なものではなくて，神性への永遠の衝動，あこがれに他ならない，ということになる．そして，伝統的な創造論では，神は創造者（創造主）であるはずであるが，Alexanderにおいては，そうではない．そうではなくて，却って，神は被造物になってしまうのである．

> Our ordinary thoughts of God are no doubt childish; but, such as they are, they begin by thinking that in the beginning God created the heavens and the earth. Alexander, on the contrary, says that in

the end the heavens and the earth will create God. [Collingwood, *The Idea of Nature*, p.163.]
神についての我々の通常の考えは，明らかに子供じみている．しかし，そうであるのは，始めに神が天と地を造った，と考えることによって始まっているのである．これに対して，アレグザンダーは，最後に，天と地が神を造った，と言う．

しかし，神は，Whiteheadにおいては，そうではない．最後に，出てくるようなものではくて，却って，始めにあるものである．ただし，アリストテレスの「不動の動者」と同じものであるかどうかは，問題として残しておくことにしなければならないが，Whiteheadの神が，アリストテレスの「不動の動者」ではない，と言う，Jean Wahlは，むしろ，現実的存在としての神のもっている次の点に注目する．

Affirmer Dieu, comme Whitehead veut qu'on l'affirme, c'est affirmer la coïncidence des opposés. Il jouit d'une éternité de vie, où se joignent la permanence et la fluidité. [Jean Wahl, *Vers le concret, Étude d'histoire de la philosophie contemporaine, William James, Whitehead, Gabriel Marcel*, p.174.]
ホワイトヘッドが，人がそうするように欲したように，神を肯定する，ということは，反対の一致を肯定することである．神は，永続（不変）と流動（変化）がそこで結び付く永遠の生に結び付いている．

永続（不変）と流動（変化）が，そこにおいて結び付く，あるいは，出会うことができる，まさに，そこ，それが，現実的存在としての神である．そうであるから，Whiteheadは，次のような言葉で，神についての記述を終えなければならなかったのかもしれない．

We find here the final application of the doctrine of objective immortality. Throughout the perishing occasions in the life of each temporal Creature, the inward source of distaste or of refreshment, the judge arising out of the very nature of things, redeemer or goddess of mischief, is the transformation of Itself, everlasting in the Being of God. In this way, the insistent craving is justified - the insistent craving that zest for existence be refreshed by the ever-present, unfading importance of our immediate actions, which perish and yet live for evermore. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, p.351.]
われわれは，ここに，客体的不滅という学説の最後の適用に達する．時間的な被造物Creatureの各々の生命における消滅する諸生起のいたるところにみられる，嫌悪ないし気分爽快の内奥の源，事物の真の本性から生じてくる審判者，救済者ないし災いの女神，それは，神の存在the Being of Godのうちに永続している［その被造物］それ自身Itselfの変換なのである．このようにして，執拗な渇望は，義とされる－存在への心からの喜びが，消滅しつつもなお永久に生きるわれわれの直接の行為のつねに現在し衰えることなき重要さによって更新されるように，と願う執拗な渇望が．［平林康之訳］

神の問題にいては，なお多くの検討すべき論点が残されているので，稿を改めて考察を加えたい．

（未完）

文献.

Collingwood, R.G. 1945(repr. 1978). *The Idea of Nature*, Oxford.
Wahl, J. 1932(2 édition). *Vers le concret, Étude d'histoire de la philosophie contemporaine, William James, Whitehead, Gabriel Marcel*, Paris.
Whitehead, A.N. 1978. *Process and Reality, Corrected Edition*, Edited by David Ray Griffin and Donald W.Sherburne, New York.
A.N.ホワトヘッド／平林康之訳，『過程と実在，コスモロジーへの試論』1，2，みすず書房，1983年.

（あかい　きよあき，　広島大学［哲学］）